

ジョセフ・ヘイヴンの『心理学』
 - 訳者西周と、少しだけヴェブレンについて -
 Joseph Haven's "Mental Philosophy"
 - Some Relations with Amane Nishi and Thorstein Veblen -

宇津木 成介
 Narisuke Utsuki

ジョセフ・ヘイヴン (Joseph Haven, 1816-1874) 著の『メンタル・フィロソフィー (Mental Philosophy)』(初版発行は1857年) は、明治11年 (1878年) に西周の手によって『心理学』として翻訳、出版された。これは我が国で最初の「心理学」の書籍であるといわれる⁽¹⁾。筆者は、日本の心理学の歴史に多少の興味をもち、西の『心理学』を読み始めたが (宇津木, 2013)、日本語への翻訳とは言いながら、漢文の素養のない筆者には、西の訳文はかなりの歯ごたえがあった。英語の原文のほうが読みやすいであろうと思い、ヘイヴンの著書を読むことに切り替えたが、西欧の思想史に関する教養に欠けた筆者にとっては別の意味で難解で、逆に西の訳文を時折参照しながら少しずつ読み進めることになった。そして読み進めるうちに、徳川幕府の命令でオランダ、ライデン大学に留学した西周が、帰国後とはいえ、なぜ北アメリカで発行された、しかも心理学の歴史に名前を残しているわけでもないヘイヴン⁽²⁾の教科書を翻訳対象に選んだのか、疑問に思うようになった。この教科書は、日本において最初に翻訳された心理学の教科書であるというだけでも、日本の心理学史において大きな意味を持っている。しかし、西周がわざわざこの教科書を選んで全訳したということであれば、西はこの教科書の翻訳に相当の価値を認めていたに違いない。それはどのようなものだったのか。以下は、いわばヘイヴンの「メンタル・フィロソフィー」という教科書の、「値うち」を探ろうとした試みのひとつである。

ヘイヴンの『メンタル・フィロソフィー』

ジョセフ・ヘイヴンの略歴

ジョセフ・ヘイヴンとはどのような人物だったのであろうか。ヘイヴンの略伝は、筆者が調べた限りでは以下のとおりである (Johnson & Brown, 1904)。ジョセフ・ヘイヴンは1816年1月4日、マサチューセッツ州のノース・デニスで生まれた。父親ジョセフ・ヘイヴン (Rev. Joseph Haven) は牧師であった。母はエリザベス・ヘイヴン。祖父もジョセフ・ヘイヴン (Rev. Joseph Haven) であった。先祖は1645年にイングランドからマサチューセッツのリン (Lynn) に移住してきたリチャード・ヘイヴンである。

ジョセフ・ヘイヴンは1835年にアマースト・カレッジを卒業し、1838年に修士号を得た。彼は1837年から1839年までニューヨークの聴覚言語障害者施設で教育に携わったかわら、ニューヨーク市のユニオン神学校 (Union theological seminary) (1836-37) とアンドーヴァー神学校 (Andover theological seminary) (1837-39) で学び、アンドーヴァー神学校を1839年に卒業した。1839年11月6日に会衆派教会の牧師となり、1839年から1846年までマサ

チューセッツ州アッシュランドの会衆派教会 (Congregational Church) で、また1846年から1850年までマサチューセッツ州、ブルックリンのハーヴァード教会で牧師 (pastor) として勤めた。

ハイヴンは1850年から、アマースト・カレッジで「知性と道徳の哲学 (Intellectual and Moral Philosophy)」を教えるようになった。彼は1858年までこの職にあった。その後1858年に、彼は新設のシカゴ神学校 (Chicago theological seminary) の組織神学 (systematic theology) の教授として赴任し、1870年までを過ごした。1870年から1871年にかけてドイツ、パレスチナ、エジプトを歴訪したあと、1871年からシカゴ大学で聖職者として、また講師としてつとめ、1873年から1874年には「心と道徳哲学」の教授代理 (acting professor) をつとめた。

ハイヴンは1840年9月23日に、アンドーヴァー神学校のラルフ・エマソン教授の娘、メアリ・エマソンと結婚している。

ハイヴンはシカゴ哲学学会の会長を務めた。1862年にマリエッタ (Marietta) から、1862年にアマースト・カレッジからそれぞれ神学博士 (D.D.) を授与されたほか、1862年にケニオン (Kenyon) から法学博士号を授与された。彼は1846年から1850年までボストンの「会衆派雑誌 (The Congregationalist)」の編集に携わり、Bibliotheca Sacra 他の雑誌に貢献した。ハイヴンの著作は“Mental Philosophy (1857)”のほか、“Moral Philosophy (1859)”、“Studies in Philosophy and Theology (1869)”、“Systematic Divinity (1875)”、“History of Philosophy, Ancient and Modern (1876)”がある。1874年5月23日死亡。

ハイヴンが卒業したアマースト・カレッジは東部の名門校であり、明治初期の日本との関係が、かなり強い。札幌農学校の設立者の一人であるウィリアム・クラーク (William S. Clark) は1848年の卒業生である。クラークは1852年からアマースト・カレッジの教員であり、新島襄を教えたことから、後に札幌農学校に赴任することになった。同志社大学を設立した新島襄は、1870年の卒業生である。新島はアマースト・カレッジに入学する以前の1866年にアンドーヴァー神学校の教会で洗礼を受け、1874年にアンドーヴァー神学校を卒業した翌年に宣教師となった (日本語wikipedia「新島襄」)。もし新島が心理学の授業をうけたとすれば、その教科書はハイヴンの教科書であった可能性がある。

アマースト・カレッジは名門校であるだけに、その卒業生には有名人が少なくない。しかし、有名人卒業生の名前をリストアップしているウェブ・ページ⁽³⁾を見ると、2つあるどちらのページにも、ウィリアム・クラークと新島襄 (Joseph Hardy Neesima)、それに後述するジョン・ベイツ・クラークの名前は掲載されているが、ハイヴンの名は見当たらない。

ハイヴンの教科書

『心理学 (mental philosophy)』は学術研究書として書かれたものではない。大学初等レベルの教科書として書かれたものである。書かれた経緯については、ハイヴン自身の前書きを読むのがよいであろう。以下は、筆者による前書きの訳である。

近年「心の哲学 (mental philosophy)」に関する著作は多数出版されている。さらに一冊を加えるとすれば、多少のいいわけが必要かもしれないが、本書が準備されるに至った事情は、おそらくそのいいわけになるだろう。

数年前のことになるが、「心と道徳の哲学 (Mental and Moral Philosophy)」課目の担当者として招聘されたとき、当時本学において用いられていた教科書は、学生の必要によく応えていないように思えた。しかしより

よい教科書に変えることも難しかった。この分野においてなされた著作であって、当時に全学で使用されていたものも、そのいくつかは、この教育段階にある若者がこの科学についておそらく持っていると思われる知識よりも、ずっと詳細な知識をもっていることを前提としていた。また他の教科書は、その反対に簡略に過ぎていて、徹底性に欠け、科学的な論述がなされていなかった。さらに、その多くは、すべてがというわけではないにしても、ひいき目に見ても不完全であり、この領域全体のごく一部を示したものに過ぎなかった。さらにどれ一つとして、単純かつ科学的に、心の科学を完全かつ調和的に提示したものはなかったし、どれ一つとして今日に通用するものはなかった。より完璧で単純で徹底した教科書が必要であると思われた。

その後、教員として経験を積むに従って、この印象は強まるばかりであったので、アメリカの諸大学における授業にもっと適した教科書が欲しいという気持は、ますます強くなった。心の科学に関する著作は、アメリカにおいても書かれてはおり、また、哲学の分野に確かに大きな貢献もしているが、上述の欠陥はほんのわずかしき改善されていない。それらの教科書は、心理学が当然に占めるべき領域のごく一部を検討しているだけであり、その注意はもっぱら「知」的能力に限定され、「情」や「意」には行き届いていない。

このような必要性を強く感じていたので、私は授業をはじめるとすぐに、もしも多くの教科書に示されたトピックについて注意深く講義の準備をおこない、授業でその講義を行えば、やがては、この欠陥を改善することができるだろうと考えた。そして私はそれを実行した。これは教師にとっては多くの負担がかかる方法であったが、学生の興味が増すこと、また進歩も早いことで報われた。本書は、このようにして少しずつできあがってきた。私の勉学の結果として、私の授業クラスとの関連において、そして暗唱と教室の日常の仕事における経験の結果として。このようにして準備された私の授業は、次第に教科書に取って代わるようになった。そして私の授業を学生の手許に置いてはいけないう理由はまったくないよう思えるようになった。

心の科学の教科書がどのようなものであるべきかを定めるよりも、そのような教科書を作り出すことの方が難しい。教科書は、分かりやすく、かつ完璧で、心理学に関するすべてのことがらを取り扱わなければならない。教科書は、提示される多様なトピックを徹底的、科学的に取り扱わねばならない。教科書は、その分野の文献に通じている必要があり、学生に正しい学説を理解させるだけでなく、ある程度までは、諸学説の歴史を教えて、学生に対して、問題の要点について、これまで何が考えられ何が教えられてきたかを示さねばならない。教科書は、その書き方について、明瞭、明快、簡潔でなければならず、しかも読み手の興味を失わせないように、ほどほどの修飾をほどこななければならない。

筆者は本書においてこれらの点を念頭に置いた。それが成功しているかどうかの判断は、読者にゆだねたい。

すべての科学は、それが完璧で真実のものになるにつれて、単純になっていく。その結果が達成されるにつれて、それに費やされた労力は目に見えないものとなり、著者は、おそらく、読者の目には、ごく平凡であたりまえのことを述べているだけとみえるであろう。これは、とりわけ心の科学においてそうである。明晰さと単純さをもって、そして同時に、完璧さと徹底性をもって、心理学の困難な問題を論じることがいかに困難であるかは、その試みをなす者によってのみ理解されるであろう。

ジョセフ・ハイヴン アマースト・カレッジ 1857年9月

つまりハイヴンは「メンタル・フィロソフィー」という学科を教えているうちに、それまでの教科書は難しすぎたり、易しすぎたり、あるいは偏っていたり、網羅的ではなかったりするので、もっとよい教科書が欲しいと思うようになり、自分でそのような教科書を作った、ということである。著者自身が大学の初等教科書であると明言し

ている590ページの著作を、どうして西は全訳し、かつ公刊したのだろうか。

その間の鍵となる事情について、フェイ (J.W. Fay) は概ね、次のように述べている (Fay, 1939)。「進歩的な教育者でブラウン大学の学長であったフランシス・ウェイランド (Francis Wayland) が、1854年に『知性哲学の初歩 (The Elements of Intellectual Philosophy)』という教科書を書き、これが何年間もブラウン大学の授業で使われた。これは単に「よい教科書」ということであったが、それまでの教科書には文献リストというものがあったのに、ウェイランドはセクションごとに引用文献リストをつけた。しかし、この教科書は知性 (intellect) についてのみ書かれており、感情 (emotion) や意志 (will) については書かれていなかった。アマースト・カレッジのヘイヴン教授は、何年かの教育の実践により、1857年に『心の哲学 (Mental Philosophy)』を出版した。」

フェイはヘイヴンの教科書について、さらに、「これは実験心理学以前の教科書として、最高の教科書のひとつであった。よく整理されて、明確かつ平易に書かれており、この時代の著作に多く見られるレトリックの飾りが無い。非常にしっかりした文献リストがあって、感覚、記憶、想像、実在論と唯名論、論理、美学、因果関係、本能、感情 (sensibilities)、そして自由意志に関する諸理論の歴史的概観が述べられている。この教科書にはさまざまな考え方が述べられているが、あきらかにハミルトン (Hamilton) の影響が見られる。論争のある問題に対しては、両論を併記した上で、はっきりした理由を付して一方を支持している」と述べている (Fay, 1939: p.126-127)。

またフェイは、「この本はすぐに最も人気のある教科書になった。・・・『この本に対する需要があまりに多かったため、増刷につぐ増刷で、活版がみるみるうちに摩耗した』との文が、1883年版の出版社広告にある」との注をつけている (Fay, 1939: p.207)。

北米最初の文芸雑誌であった『ノース・アメリカン・レビュー (The North American Review)』誌は、教科書出版の翌年に、「この本は、完璧かつ網羅的な章立て、明快な配列、そして簡潔明瞭であると同時に優雅であるという点において傑出している。新しい見解が得られたというような見せかけがない。かわりに、論じられているどの項目も、著者自身の厳しい検討を経て書かれている。従って新しいものはないけれど、表現も説明も新鮮である。(中略) さらに、主要な各章の末尾に、歴史的概観が添えられていて、知の科学の一分野においてなされた思想の進展、及び多様な見解を説明しているという点についても、言及すべきであろう。」と記している。

フェイの評価、また書評から、ヘイヴンの教科書は非常にしっかりと書かれた良心的な教科書であり、とりわけ、自説中心にならず、偏らず、歴史的展望とともに学習者にとって貴重な文献リストが備わっていたことがわかる。この教科書は非常によく売れた。後述するようにヘイヴンの死後にも売れ続け、新古典派経済学者であるジョン・ベイツ・クラークはこの教科書を使って、制度経済学者ソースティン・ヴェブレンを教えた。

西周の訳書

西周が日本語に訳した西欧外国語書籍は、国会図書館の蔵書に関する限り、以下のとおりである (以下の表記はすべて国会図書館のウェブページ表記による)。

利学 約翰・士低瓦的・弥留 (ジョン・スチュワート・ミル) 著、西周 訳 島村利助 1877

性法説約 西周 訳 高田義甫 1879

万国公法 [Simon Vissering] [原著]、西周助 訳 竹苞楼 [ほか] 1866

仏国収税法 抜的比 (バトビ) 著、米田精 訳、西周 閱 大蔵省租税局 1878

心理学 約瑟・奚般 (ジョセフ・ヘーヴン) 著、西周 訳 文部省 1876

このうち、『利学』はジョン・スチュワート・ミル（John Stuart Mill）の“Utilitarianism”の翻訳であり、本文の量は、原本は96ページであるが、訳書では上巻が67ページ（見開きを1ページとする）、下巻が64ページ（同）である。『性法説約』はオランダ、ライデン大学のシモン・フィッセリング（Simon Vissering）の講義録であり、日本語では47ページである。原本は示されていない。講義録であるから、原本というものはないのであろう。『万国公法』は同じくシモン・フィッセリングの著書であるとされるが、訳書はデジタル化公開されていない（2014年6月現在）⁽⁴⁾。『仏国収税法』の原本はフランス人法・経済学者バトビ（Anselme Polycarpe Batbie）の“Traité théorique et pratique de droit public et administratif”の第6巻の95条から606条までを訳したものである。これは原本の89ページから595ページに当たる。訳書本文は803ページである。ただし、西周閲、米田精訳となっているので、これを西周の訳とすることは適切ではないだろう。

『心理学』はハイヴンの著書であり、原本が本文569ページのところ、明治8年の3巻本が見開きを1ページとして計252ページ、明治11年の上下本をまとめた全1巻本では728ページである。つまり、西が単独で訳して公刊した書物の最大のもは、このハイヴンの『心理学』であることになる。

フィッセリングはオランダ（ネーデルラント王国）で財務大臣を務めた経済・政治学者である。西周と、西と同時に留学した津田真道とはフィッセリングから法学・経済学を学んでいる（国立国会図書館，2009）。西と津田にとって、これらの知識の摂取は留学の目的であるから、その講義録の翻訳は、いわば留学報告書とでも言うべきものであろう。つまり、西の公務との整合性を考えると、J.S.ミルの翻訳やハイヴンの翻訳に高度の重要性があったとは思えない。一方、ページ数を考えても、このハイヴンの著作は、公刊された西の翻訳としては、非常に大きな比重を占めているから、西がこの著作を翻訳するにあたっては、それなりの大きな理由があったであろうと考えてよいであろう。

ハイヴンの教科書に対する西の評価

西周はハイヴンの『心理学』の冒頭で、西自身のコメントを「心理学翻訳凡例」として述べている。最初に簡単な著者と原著の紹介のあと、訳語についての説明があり、その後にハイヴンの著書の特徴について述べている。その部分を現代語に訳したものを以下に示す。

「ヨーロッパにおける性理（知の哲学：筆者注）の本については、多くの著者のたくさん著作がある。本書の巻末にある引用図書目録を見れば、そのことがわかる。訳者の乏しい能力では、そのごくわずかな一部についても理解が及ばないのであるから、書物によって考え方が違うかどうかなど、まったくわからない。とはいえ、最近のヨーロッパの著作をいくつか読んでみると、新しい知見や考え方が多数みられるのであるが、本書は、それらの新しい知見や考え方は採用していないようである。ただ、本書は論旨が明快であり、説明も詳しい。哲家（哲学者：筆者注）の著作では論理がわかりにくく、難解なことがよくあるけれども、本書はそのようなことがない。さらにこの領域に必要とされる用語には漏れがなく、筋道がはっきりして理解しやすい。したがって初めてこの分野を学ぼうとする人々が入門書として使用し、より高い理解に至ろうとするのであれば、本書は最適であろう。」

西のこの評価は、先のフェイの記述や、ノース・アメリカン・レビュー誌の批評と驚くほど一致している。つまり、新しいものはないが、網羅的であり、明快でわかりやすい、ということである。言うなれば、西欧の心の哲学について一通りのことを学ぼうとすれば、この本がお薦めですということである。それにしても、どのようにして西は、このハイヴンの教科書が偏りなく網羅的で平易なよい教科書であることを知ったのだろうか。

筆者が所持しているヘイヴンの教科書は1859年版であるが、この版にも、本文のあとに出版社の広告ページがある。その広告によれば、「この教科書は、網羅的で、科学的であり、歴史概観と文献リストがあり、最新の結果が含まれており、簡潔である。また、すでに各地の主要校で採用されており、他書を凌駕する勢いである」という。西が訳したのは1869年版であるが、もしそこにも同様の広告があったとすれば、「よく売れている、よい教科書らしい」ことは推察がついたかもしれない。

アマースト・カレッジ

順序が逆になるが、西の「心理学翻訳凡例」の冒頭2パラグラフは以下の通りである。なお、()内は西がつけた振り仮名である。

原書はアメリカ連邦の人、約瑟奚般（ジョセフ・ヘーブン）氏の著わす所にして、ヘーブン氏は前時、俺墨斯徳（アムメルスト）の大学校にて性理道德二科の博士より後来、智加俄（チカゴ）府の神教書院に転じ、模範神理学の博士たりし人なり。

書名は「メンタル、フィロソフィー、インクリューゼング、インテルレクト、センシビリチーズ、エンド、ウィル」と題し、智情意三部を包括せる心理哲学と言う義なり。今約して心理学と名（ず）く。

西はAmherst Collegeを俺墨斯徳（アムメルスト）の大学校と訳している。西はなぜ「アムヘルスト」のように訳さず、「アムメルスト」と訳したのであろうか。素朴に考えれば、Amherstはamとherstとに区分できるであろう⁽⁵⁾。西はおそらく、オランダ留学を通じて、西欧諸語の基本的な発音については学んでいたであろうから、英語においてhをどのように発音するかということについても知っていたに違いない。とすれば、まず「アムヘルスト」と音訳するのではないか。

西が訳した「心理学」は1869年版である。西がオランダに留学していたのは、1862年から1865年までであるから、留学中に西がこの原書を手に入れたはずはない。だから素直に考えれば、帰国後に、西はアマースト・カレッジの出身者あるいはアマースト・カレッジについてよく知っているアメリカ人と接触があって、この学校名（あるいは地名）に限ってはhを発音しないということを知ったのではなかろうか。初版は1857年発行であるから、オランダ在住中に原書を目にした可能性もなくはないが、それならば西はその版を購入して持ち帰ったであろう。

基本的にAmherstのhは、「現地の人々は発音しないが、よそからきた人々は発音する」ようである⁽⁶⁾。つまり、西がもしも英国人や、アマースト以外の土地の人からこの単語を知ったとすれば、hを発音するように「アムヘルスト」とルビを振ったのではなかろうかということである。逆に、西が「アンメルスト」出身者と比較的親しく付き合っていたとすれば、西はその人物から、「アンメルスト出身のヘイヴンという先生がいて、非常にわかりやすいことで評判の良い教科書を書いている」「新しいことは書いていないが、偏りがなく、簡単な歴史もあって文献リストがしっかりしているから、読んだらどうだろう」「ついでにうちの町の名はアムヘルストではなく、アムメルストと発音するのだ」といったアドバイスを受けていたかもしれない。

西が『心理学』翻訳以前に、出会ったアメリカ人の誰かから、アマーストの発音について聞いたという可能性はいくらでも考えられるが、そのような人物を特定するのは困難であろう。西は安政3年（1856年）に中濱萬次郎から英語発音を習っている（森，1898）。中濱はマサチューセッツ州フェアヘイヴンの学校で教育を受けた（英語版wikipedia: Nakahama Manjirō）。勝手な想像であるが、当時30歳の中濱が27歳の西に、マサチューセッツ州の地図

を広げて州内の地名の発音を講じ、その中にアンメルストがあったかもしれない。

ハミルトンとJ.S.ミル

西がハイヴンの教科書を選んで翻訳した最大の理由として推測されるのは、J.S.ミル（John Stuart Mill）の著作を訳した西は、ミルとハミルトン（William Hamilton）の論争について、強い興味を持っていたに違いないということである。前述したフェイのコメントには「ハイヴンの教科書には明らかにハミルトンの影響がある（The work is eclectic, but shows clearly the influence of Hamilton.）」とのみ書かれていた（Fay, 1939）。フェイの著作の人名索引には3名のハミルトンが挙げられている。ハイヴンが影響を受けたのが、どのハミルトンであるかは、本論文を書き始めてから明らかになった。

ここで言及されているハミルトン（Sir William Hamilton）は、スコットランド常識哲学といわれる学派の哲学者である。ハミルトンとミルの論争について、大久保（2013）の解説を簡単にまとめれば、ハミルトンは、直観によって真理にたどり着くことができることを否定しなかった。ミルは経験と実証によってしか真理には到達できないと考えていた。

ハイヴン自身が、ハミルトンとミルの論争に非常に強い興味を持っていたことは、彼自身の著作に“Mill versus Hamilton”という論文があることからわかる（Haven, 1868）。ハイヴンはこの論文で、経験論と先験論（あるいは超越論）、実在論と観念論、知識の絶対性と相対性についてそれぞれ簡単に両者の立場を述べたあと、ミルの主張の欠点について14ページを、ハミルトンの主張の欠点について7ページを割いて論じている。結論は、ハミルトンの主張は全体としては受け入れられるが、ミルの主張は全く間違っている（fundamentally erroneous）ということである（Haven, 1868）。ハイヴンは、まず第一に、会衆派の牧師であったから、ごく素朴に考えても、無神論に行き着くしかないミルの思想に、ハイヴンが賛同することはなかったろう。

この論文が出版されたのは西が翻訳した『心理学』1869年版発刊の前年であるから、西がすでにハミルトンとミルのあいだに論争があることを知っており、この論争に興味を持っていたとすれば、教科書に触れるより先に、このハイヴンの著作に触れた可能性もある。ハイヴンが論文を書いた“Bibliotheca Sacra”誌は、1844年創刊の合衆国最古の神学雑誌である（英語版wikipedia、Bibliotheca Sacra）。当時日本に多数が来ていたと思われる北米からの宣教師たちがこの雑誌を購読していたことは、確実と言ってもよいであろう。西が帰国した1865年に始まったこの論争に西が興味をもったとすれば、西は、まずハイヴンをこの論文で知り、ついで、ハイヴンがよく売れている教科書の著者であり、その教科書は偏りなく「心の哲学」の諸学説を紹介していることを知って強く惹かれたという経緯があったかもしれない。西周自身は、キリスト教に心酔するということにはなかった。彼は明治政府における政治と軍事というごく現実の問題を処理しながらも、法の根源として性法（自然法）の重要性を認識し、心の働き一般に対する強い知的興味を保ちつづけていた人物である。西欧の心の哲学の概要が初学者にも偏りなく理解できるという評判のあったハイヴンの教科書に魅力を感じ、この本を訳すことが日本人の啓蒙に必須であるという判断と動機づけがあったと考えてよさそうである。

ハイヴンとヴェブレン

最後に、制度経済学を創始したソースティン・ヴェブレン（Thorstein Veblen）とハイヴンとの関連について少しだけ述べる。

ヴェブレンは、ミネソタ州のカールトン・カレッジ（Carleton College）在学中に、アメリカの新古典派経済学者

であるジョン・ベイツ・クラーク (John Bates Clark) の指導を受けた。クラークは、アマースト・カレッジの1875年の卒業生であり、ドイツ留学後、1875年から1881年までカールトン・カレッジの教員として勤務していた。また、ヴォーン (Vaughn) によれば、クラークはカールトン・カレッジ (Carleton college) でヘイヴンの “Mental Philosophy” をテキストにして “Intellectual Philosophy” を講じたが、ヴェブレンは1879年から1880年の間、この授業を受けていた (Dorfman, 1935; Vaughn, 2006)。

ドガート (Daugert) は、「ヴェブレンはアメリカ中西部の社会の宗教的支配に我慢ができず、J.S.ミルによるハミルトン批判によって目覚めることになった (p. 3)」。また、「ヴェブレンが帰納法を重要視したのは、カールトン・カレッジ時代にジョセフ・ヘイヴンの教科書でメンタル・フィロソフィーを学び、スコットランド常識哲学の訓練を受けたことに由来する (p. 21)」と述べている (Daugert, 1950)。また、ヴェブレンが1880年にカールトン・カレッジで行った卒業講演は、ミルによる『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学を検証する (An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, 1865)』を題材にしたものである (Dorfman, 1935: 訳書p.50) が、先に述べたようにヘイヴンは、このハミルトンとミルの論争について論文を書いているので、ヴェブレンはおそらくヘイヴンの論文を読んでいただろうという (Vaughn, 2006)。こうしてみると、ヘイヴンの教科書を訳した西周も、ヘイヴンの教科書で学んだヴェブレンも、ヘイヴン同様にハミルトンとミルの論争に強く惹かれていたと結論づけることができるだろう。ヘイヴンの教科書の内容が、西周、またヴェブレンの思想とどのように関連するのかという問題については、西周の研究者でもヴェブレンの専門家でもない筆者の現在の知識の範囲を越えている。ご教示をいただければ幸いである。

まとめ

西周が全訳した『心理学』の著者であるヘイヴンについて、その人物像を知りたいという好奇心と、なぜ西はこの著書を選んだのかという疑問に答えるため、やや古い書籍に当たり、またwebを探索した。その結果、ヘイヴンの教科書は当時、非常に評判のよい教科書であったこと、また、ブリトンの思想史において、観念論的な、あるいは今日の心理学的に言えばトップダウンの、スコットランド常識哲学と、ボトムアップであくまで帰納的な経験論との対立の中で、宗教家としてのヘイヴンがハミルトンに賛同し、ミルを批判しながらも公平に両者の思想を紹介したことがわかった。また、ヘイヴンの著作が、おそらくは西周とヴェブレンとに影響を与えた可能性について示した。つまり、ジョセフ・ヘイヴンは「それほど有名ではない」にしても、決して「重要ではなかった」わけではないということである。

ヘイヴンの教科書から35年たった1892年に、ウィリアム・ジェームズの『心理学 (短縮版) (Psychology, Briefer Course)』が出版された (James, 1892)。それは、北アメリカの心理学がキリスト教の哲学から自然科学に、あるいは西欧において心理学が哲学から自然科学に、この35年のあいだにはっきりと、その性格を変えたことを示している。ヘイヴンの『心理学』は最後のキリスト教心理学、哲学的心理学の教科書であったと言えるだろう。

おわりに (謝辞)

西周が翻訳した「心理学」の著者であるヘイヴンとはどのような人物なのか、入手が容易な資料を見る限りでは、詳細な人物像はわからなかった。そのような状況が一変したのは、web上でヘイヴンに関する著作を検索していて、たまたま、農業経済学者であるヴォーン氏の論文 (Vaughn, 2006) に遭遇したことによる。ヴォーン氏のこの論文は、ヴェブレンの思想形成に、ヘイヴンが強く影響を与えたというものである。この論文に触発されて、筆者は

ヴェブレンの「有階級の理論」を読み、これまでヴェブレンを知らなかったことを恥じるようになった。

ヴォーンによるハイヴンの履歴はJohnson & Brown (1904) に依って筆者が書いたものより、もう少し詳しい。例えば、ハイヴンの先祖の多くは牧師であり、牧師であった父親はハーバードの卒業生であった。息子であるジョセフ・ハイヴンは、アマースト・カレッジにおける最年少の学生であり、優等で卒業した。学部卒業生の中でもっとも文章がうまいとみなされており、“Sources of Superstition” という題目で卒業総代演説を行った。結婚後、彼は10人の子どもに恵まれた。結婚相手のエマソン家は、思想家・詩人として有名な、ラルフ・ワルド・エマソン (1803-1882) の縁者である。ハイヴンはウィリアム・ハミルトンの哲学を講じたが、1854年にはエジンバラにハミルトンを訪ねるとともに、ベルリンにフリードリッヒ・シェリングを訪ねた。ハイヴンは1874年5月23日に腸チフスで死亡した。ハイヴンの教科書は評判がよく、いくつかの外国語にも翻訳されたとヴォーンは述べているが、どの外国語に訳されたのかは述べられていない。

これらの記述については出典が明らかでないものも散見されたので、ヴォーン氏にメールを送り、ご教示をお願いしたところ、この論文が出た2006年に奥様を亡くされて、以来、研究の意欲を全く失ったのでお助けはできかねます、というお返事をいただいた。それでも、ハイヴンのヴェブレンに対する影響について、ハイヴンの著作のうち、読むべきいくつかの章名を教えて下さった。

当初、ヴォーン氏の論文を、氏と掲載誌の許可を得た上で翻訳して紀要に投稿することを考えていたが、このような経緯から、ヴォーン氏の論文に大きく依拠しながらも、そこで示されている資料や論文に直接にあたって本稿を作成することにした。それでも、ハイヴンについて多くの資料の存在を知ることができたのはすべて、ヴォーン氏の論文のおかげである。感謝の意を表するとともに、亡くなられた奥様のご冥福をお祈りする。

注

- (1) 松本亦太郎の心理学史 (1937年刊) には、「心理学なる術語は西周が明治11年に明治2年発刊のヘヴンの著作を訳した時、此学を知情意三部を包括する心理哲学という意なりとし、これを心理学となずくといったのに濫觴する (明治11年2月文部省印行)」とある (松本, 1937: p. 397)。しかしこれには異論もある (兒玉, 1994)。また、西周訳の『心理学』は、国会図書館の所蔵をみると、明治8年 (1875年) の3巻本、明治11年 (1878年) の上下2巻本、及びその後この上下2巻を合本したものの再版または復刻がある。3巻本の内容は検討していないが、ページ数を見ると、上下2巻本よりも短いようである。
- (2) ハイヴンは一流の心理学者として名を残したとは考えられないし、また心理学に貢献した人物として明確に認識されているわけでもない。例えば、1000人近い人物名を目録に載せている心理学史 (Murphy & Kovach, 1972) にヴェブレンの名前はあがるが、ハイヴンの名前はない。英語版のwikipediaにも、日本語版ウィキペディアにも、項目名にハイヴンの名前はない (2014年6月現在)。
- (3) 同窓会の記述については、http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_Amherst_College_people および http://en.wikipedia.org/w/index.php?title=Category:Amherst_College_alumni&from=C
- (4) 『万国公法』には、ヘンリー・ホイートン (Henry Wheaton) 著、アメリカ人宣教師ウィリアム・マーティン (W.A.P.Martin, 中国名: 丁韞良) 漢訳の書があり、この漢訳版に西が訓点をつけた『開成所版万国公法』がある。別に、西が関わったものとしてフィッセリング口述・西周訳『和蘭畢洒林氏万国公法』官版書籍製本所」慶応4年 (1868) があるが、これは西による翻訳原稿が鳥羽伏見の戦いで失われ、その後、写本が出

版されたものであると述べられている（以上、日本語版wikipedia「万国公法」の記事による）。一方、国会図書館蔵書の『万国公法（和蘭畢酒林氏万国公法）』（4巻）は Simon Vissering（原著）、西周助（訳）、慶応2年（1866）、竹苞楼（ほか：NDL-OPAC検索結果）刊で和装4冊となっている。国会図書館のウェブページにある画像によれば、『畢酒林氏説 官版 万国公法 全四冊 慶応四戊辰年 西周助訳述』とある。デジタル化はなされておらず、筆者は内容に接していないが、刊行年も発行所もwikipediaの記述とは異なっている。長尾龍一（2005）によれば、西周と津田真道の訳によるフィッセリング講義録である。『性法説約』が京都の混乱で失われ、その後、失われたはずのものが明治になって出版されたように書かれているので、あるいはいずれかの記述に混同があるのではなかろうか。

- (5) Herst の語源については、Online Etymology Dictionaryによれば、「"hillock" (especially a sandy one), also "grove, wooded eminence," from Old English hyrst, from Proto-Germanic *hurstiz (cognates: Middle Dutch horst "underwood," German Horst "thicket, shrubbery"). Common in place names (such as Amherst)」とある。（<http://www.etymonline.com/>）
- (6) アマースト・カレッジの同窓会ホームページの記事には「なぜアマーストの人たちは、町の名前のhを発音しないのか」という、以下のような記述がある。

「なぜマサチューセッツ州アマーストの人々は町の名前のhを発音しないのか。そして第一シラブルのAにアクセントを置くのか。住民とよそものを区別するためだという説がある。土地の名前はしばしば発音が簡略化されるからだという説もある。よそから来た新入生は、最初はhを発音する。また、この町の名前のもとになった（アメリカ独立戦争で活躍した）英国陸軍元帥（Field marshal）Lord Jeffery Amherstの子孫は現在でも自分たちの苗字のhを発音している。」

（<http://www.umassmag.com/2009/Fall-09/features/silent-h.html>）

参考文献

- Daugert, S.M. (1950). *The Philosophy of Thorstein Veblen*. King's Crown Press, Columbia University, New York.
- Dorfman, J. (1934). *Thorstein Veblen and His America*. ヴェブレン<その人と時代> 八木甫（訳） HBJ出版局 (1985)
- Fay, J.W. (1939). *American Psychology Before William James*. Rutgers University Press. New Brunswick, NJ.
- Haven, J. (1857). *Mental Philosophy*. Boston. Gould and Lincoln. (1859)
- Haven, J. (1868). Mill Versus Hamilton. *Bibliotheca Sacra* 25. No. 99, 501-535.
- James, W. (1892). *Psychology Briefer Course*. Henry Holt & Co. New York.
- Johnson, R., & Brown, J.H. (1904). *The twentieth century biographical dictionary of notable Americans (Vol. 5)*. The Biographical Society.
- 兒玉齊二（1994）. 日本の心理学 心理学史への招待（梅本・大山編著）17章 サイエンス社
- 国立国会図書館（2009）. 江戸時代の日蘭交流 第2部（http://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_6.html）
- Marphy, G. & Kovach, J. (1972). *Historical Introduction to Modern Psychology (Third Ed.)*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc. NY. New York.
- 松本亦太郎（1937）. 心理学史 改造社

- 森林太郎 (1898). 西周伝 国会図書館蔵書 (<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781845>)
- 長尾龍一 (2005). フィセリングと自然法 (http://book.geocities.jp/ruichi_nagao/Visseringokubo.html)
- The North American Review (1858). Mental Philosophy: including the Intellect, Sensibilities, and Will. By Joseph Haven, Professor of Intellectual and Moral Philosophy in Amherst College. Boston: Gould and Lincoln. 1857. 12mo. Pp.590. *The North American Review* 86, 283-284.
- 西 周 (1878). 心理学 (上・下) 岡島英法堂 (1882)
- 大久保正健 (2013). ジョン・スチュアート・ミルと直観主義形而上学 有江大介 (編著) ヴィクトリア時代の思潮と J.S.ミル (第7章) 三和書籍
- 宇津木成介 (2013). 心理学学術用語の初期の訳語について - 明治期に試みられた英語からの翻訳語 - 日本心理学会第77回大会発表論文集 p.5
- Vaughn, G.F. (2006). Amherst Professor Joseph Haven and His Influence on America's Great Social Critic, Thorstein Veblen. *Historical Journal of Massachusetts* 34, 39-55.